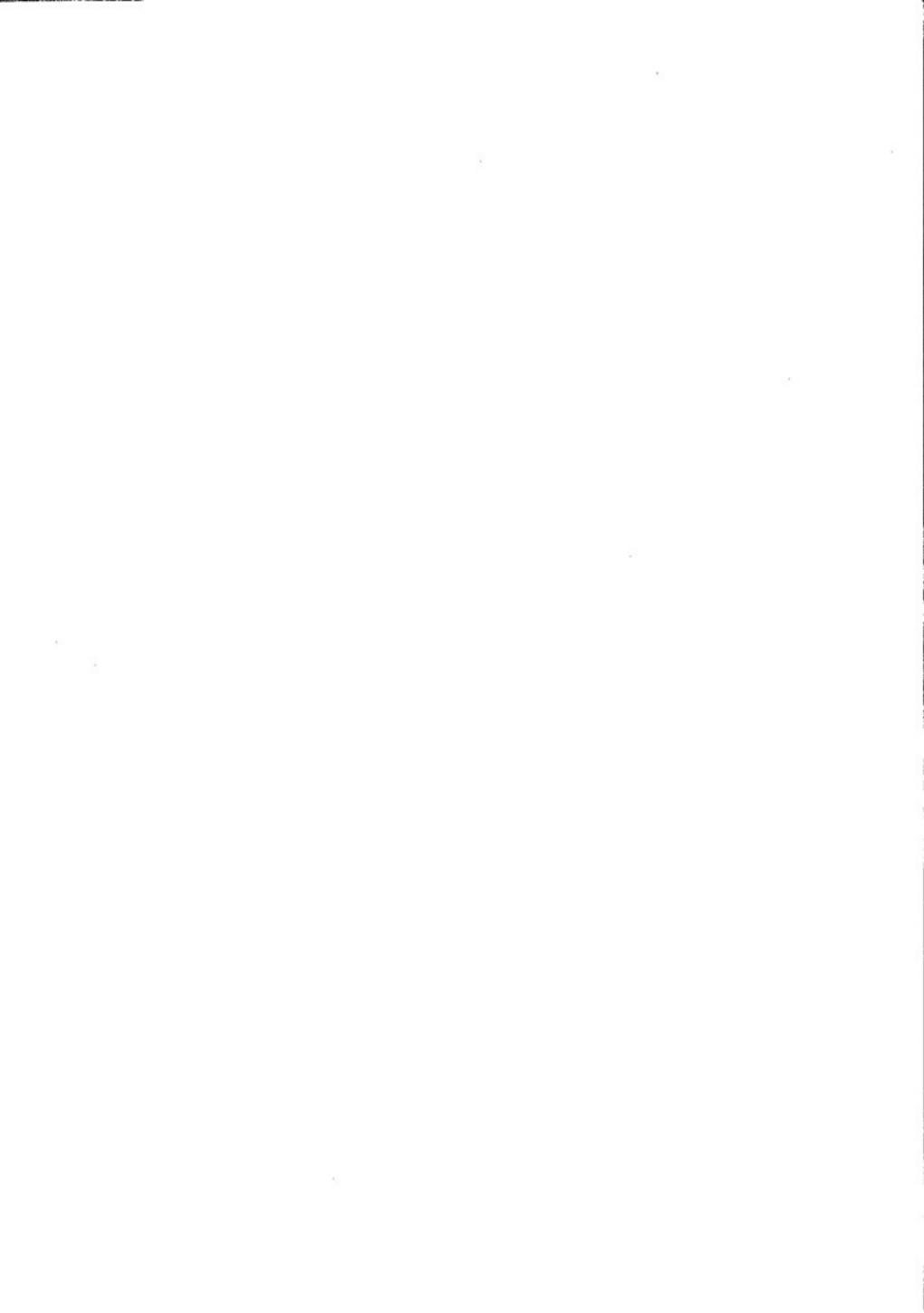


# 高向遺跡発掘調査概要

溜池等改修事業丹保池改修工事に伴う埋蔵文化財調査

2000年3月

大阪府教育委員会



## はしがき

広大な市域を擁し、多数の国宝、重要文化財を所蔵する金剛寺や觀心寺など、歴史豊かな南河内の地域でも有数の歴史的、文化的遺産に恵まれた河内長野市には、旧石器時代から近世に至る数多くの遺跡が存在します。

ことに、石川西岸に開けた平地には帶状に遺跡が集中しており、中でも高向遺跡は大規模な遺跡の一つとして知られています。

このたび、丹保池改修工事に先立つ発掘調査を実施しましたところ、古墳時代から奈良時代に至る遺物が出土したほか、池の築造に伴う杭列などが確認されました。

これらの成果は、周辺の開発や条里の施行など歴史を解明していく上で貴重な資料となるものであります。

発掘調査の実施にあたって格別のご協力を賜った河内長野市教育委員会と地元のみなさまに厚くお礼申し上げますとともに、今後とも文化財の保護にご理解とご協力をお願いいたします。

平成12年3月

大阪府教育委員会  
文化財保護課長 小林 栄

## 例　　言

1. 本書は平成11年度に実施した、溜池等改修事業丹保池改修工事に先立つ高向遺跡の発掘調査概要である。
2. 調査は、大阪府環境農林水産部から依頼を受けた大阪府教育委員会文化財保護課が、平成11年11月2日から平成12年1月15日まで調査第1係主査広瀬雅信を担当者として実施し、現地調査については河内長野市教育委員会社会教育課主幹兼文化財保護係長尾谷雅彦氏及び河内長野市立ふれあい考古館館員藤原哲氏の全面的な協力を得た。遺物整理は発掘調査と並行して市立ふれあい考古館において実施し、平成12年3月31日に完了した。
3. 本書の執筆、編集は一部広瀬、尾谷が執筆した部分を除いて藤原が行った。
4. 発掘調査及び内業整理については下記の方々の参加・協力を得た。記して感謝する。  
(敬称略)  
大塚美幸・菊井佳弥・杉本祐子・株式会社泉土木・内外エンジニアリング株式会社
5. 写真撮影は、遺構については藤原、遺物については中西和子氏（市立ふれあい考古館）が撮影した。
6. 本調査に要した費用は農林水産省及び文部省の国庫補助を得て、大阪府環境農林水産部と大阪府教育委員会が負担した。

## 目 次

はしがき

例言

目次

第一章 調査に至る経緯	1
第二章 位置と環境	1
第三章 調査の成果	4
1 基本層序	4
2 遺構と遺物	4
第四章 まとめ	10

## 挿図目次

第1図 調査区位置図と既往の調査区（表1と対応）	2
第2図 調査地周辺の地形	3
第3図 S A 1出土遺物実測図	5
第4図 調査区平面図及び断面図（杭は見通し図を合成）	6
第5図 杭1~17出土状況実測図	7
第6図 杭22~31, 34出土状況実測図	7
第7図 包含層出土遺物実測図	8
第8図 丹保池表採遺物実測図	8
第9図 築堤盛土出土遺物実測図	9
第10図 既往調査で検出された建物軸（表2と対応）	11
第11図 古代の開発対象地帯と推定居住域	12
第12図 高向周辺の条里プラン（N-35°-E又はN-55°-W）	13

## 表 目 次

表1 既往の調査区一覧（第1図と対応）	15
表2 既往調査で検出された建物一覧（第10図と対応）	15

## 図版目次

図版1 航空写真	
図版2 調査区全景（南西から）、調査区全景（北東から）	
図版3 杭列検出状況（北西から）、杭列検出状況（北東から）	
図版4 北東壁断面 杭33・34、杭1~4	
図版5 杭11~21、杭26~31 S X 1	
図版6 杭30・31・33・34、包含層（9）、築堤盛土（15~24）、表採（14）	

## 第一章 調査に至る経緯

大阪府では農業基盤整備の一環として、老朽化した溜池の改修事業を進めている。当遺跡の範囲に含まれる丹保池も堤体の改修が必要となつたため、文化財保護課では環境農林水産部との協議に基づき、平成10年度に池内の確認調査を実施した。その結果、池内の大部分は築造時に遺構面以下まで大きく掘り下げられていたものの、北と東の堤体に近い部分では遺構面と遺物包含層が良好に遺存していることが判明したため、改修で毀損される部分について平成11年度から2年で本発掘調査を実施することとした。本書に収録したのはその初年度、80m<sup>2</sup>分の調査結果である。

## 第二章 位置と環境

調査地が含まれる高向遺跡は、大阪府河内長野市高向、及び上原町に位置する。河内長野市は大阪府南東部に位置し、南部と東部をそれぞれ和泉山脈、金剛山脈に囲まれている。このうち和泉山脈に源を発する石川は市内を真っ直ぐ北東に流れ、富田林市、羽曳野市を通り藤井寺市と柏原市との市境で大和川に合流する。高向遺跡はこの石川上流左岸の中位段丘上に位置する。標高は約150mである。この段丘の西側は南西から北東にかけて小山田丘陵が急な段丘崖を形成しており、東は石川を跨いで宮山などの丘陵が形成される。

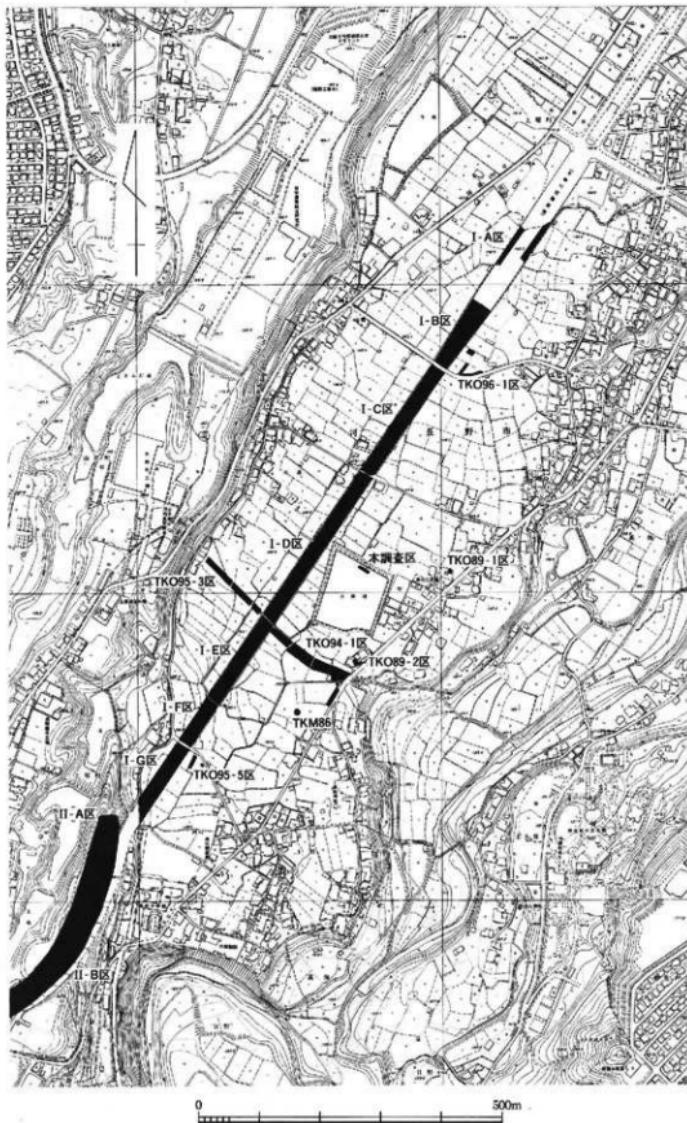
歴史的環境としては、石川を見下ろす段丘上に縄文時代の遺跡が存在しており、高向周辺だけで宮山遺跡、高木遺跡、懸持寺跡、上原遺跡などが密集する。弥生時代には遺跡の数が減少するが、北東2kmには三日市遺跡、大師山遺跡など著名な遺跡が存在している。

8世紀以降になると市域では本格的な開発が進行しており、当遺跡でも出土遺構・遺物が急増する。同時期の市内の遺跡としては北東1.8kmの喜多町遺跡、小塙遺跡などがあり、大阪狭山市との境である小山田町からは二基の火葬墓が発見されている。

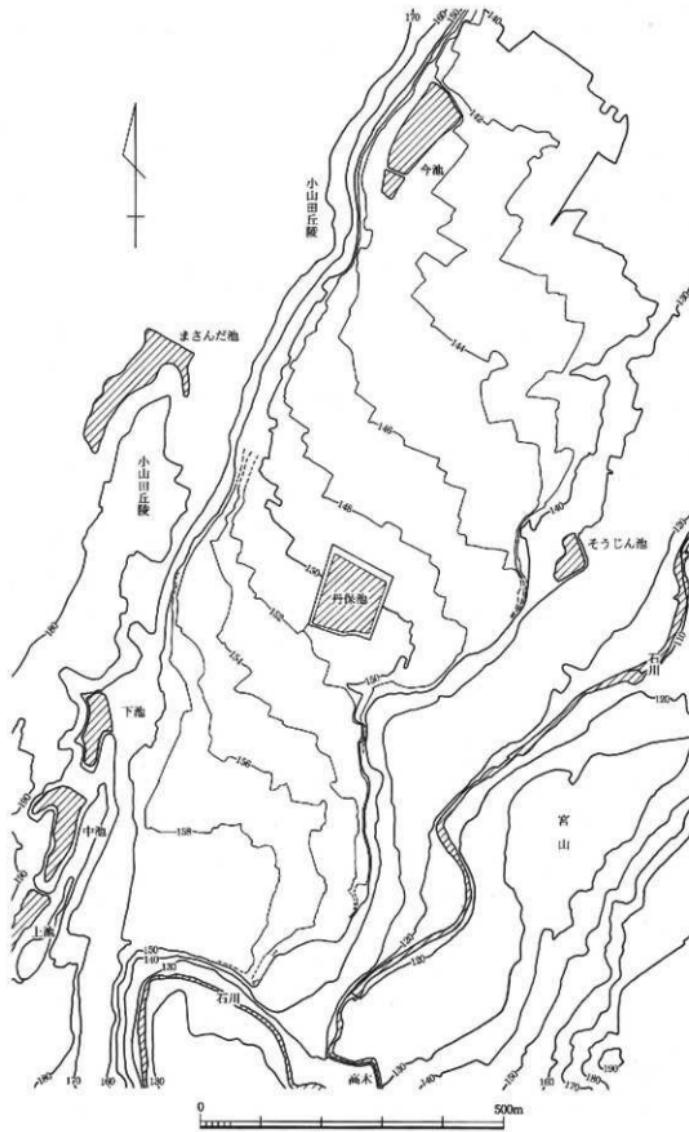
中世に入ると高向遺跡に接続した懸持寺跡、高向神社遺跡などから遺物が出土しており、南西2kmには大寺院である天野山金剛寺が位置している。

また、当該地は文献に散見できる「高向莊」の故地に比定されてきた。高向莊の四至は「東限山峰并河 南限高木 西限和泉横路 北限櫛谷」とあり、遺跡の所在する中位段丘がその中心部分に該当すると思われる。高向莊の名称は戦国期まで見ることができ、近世には「高向村」として旗本の甲斐庄氏及び三好氏の知行となった。

近世以降は江戸時代より最近に至るまで地形的な変化が少なく、良好に遺跡が保存されていた。しかしながら昭和62年に国道170号が延伸し、それに関連した発掘調査では高向遺跡の考古学的な成果が得られた。またその後も開発は進行しつつあり、考古学的な知見が蓄積し現在に至っている。（第1図、表1）



第1図 調査区位置図と既往の調査区（表1と対応）



第2図 調査地周辺の地形

### 第三章 調査の成果

#### 1 基本層序（第4図、PL4）

調査地は丹保池の北堤部にあたる。特に遺構面は現在の池の底部分に近く、池底より0.5~1.7mの高さを測る斜面地帯である。これより2.5mで現在の堤部の最上部分に達する。

調査区内の層序は築堤による盛土の擾乱が2m近くも堆積しており、包含層の残存状態は非常に悪かった。比較的包含層の残りの良い調査区北東部分での堆積は表土・擾乱の下に灰白粘土（包含層）が続き、白粘土、若しくはグライ化したシルト層の地山に至る。検出した遺構は全て地山面で検出した。北東隅以外では築堤盛土による擾乱が地山面まで達しており、部分的に包含層が堆積するか、盛土中にブロック土として混入していた。従って築堤盛土より出土している遺物の多くは、この包含層ブロック土のものが含まれていると考えられる。

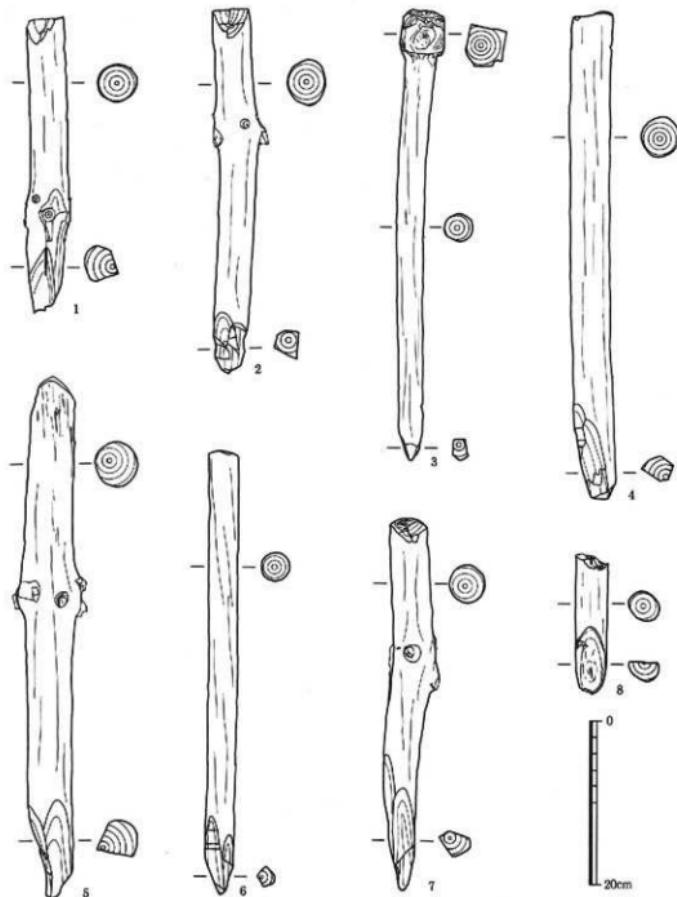
また築堤盛土の擾乱はT.P.+148.7m付近でさらに1.7mほど南へ急激に落ち込み、T.P.+147mの灰色の砂礫層まで切り込んでいた。ここまで達すると湧水が激しく、事実上遺構を検出したのは調査区の北半分のみである。この急激な落ちが旧地形を反映しているか否かは明らかにできなかったが、後述する杭列遺構の存在を考えると、ある程度の旧地形を反映している可能性が高い。

#### 2 遺構と遺物

##### 杭列（SA1）（第3~6図、図版1~6）

調査区北半分、東西にかけて計33本の杭列を検出した（杭-32は遺物取上時に調査区外にて検出）。ほぼ全て地山面で検出しており、築堤盛土により上部を削平されている。残存長の最大のものは北東隅の杭-31の65cmで、最小のものは先端部分のみの杭-28で18cmを測る。これらの杭列は大半が径約5cmで、自然木を鉄斧により多少の加工を施して先端を尖らせてある。ただし、杭-3のみ一部角材に加工した痕跡が認められた。

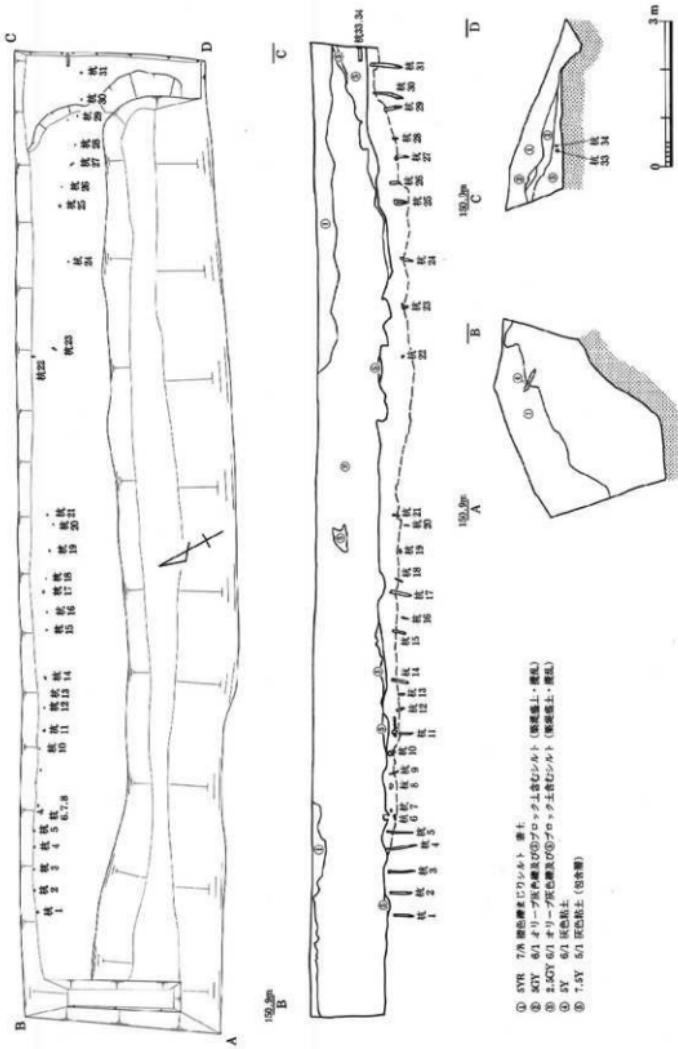
杭間は西端で40cm間隔であるが、特に規則性は認められない。杭の先端部はT.P.+148.0m~148.2mを測る。削平している築堤盛土の底部分は礫が多く、検出段階で礫や土圧によって多くの杭が歪んでいたり、折れている状況であった。検出した杭には縦杭と横杭の二種類が見られたが、杭33本のうち横杭は3本である（杭-22・33・34）。このうち東壁で断面観察の可能な杭-33・34は灰色粘土の包含層内で、T.P.+148.9mに位置する（第4図）。横杭が見られたのは東側のみであったが、西側は築堤盛土による削平を受けており、本来は同じ状態であったと思われる。つまり検出した杭列の構造としては縦杭を



第3図 SA 1 出土遺物実測図

打ち付け、しかる後に横木を付属させたものと考えられる。上記の観察から、杭列遺構は丹保池北堤部の土止め的機能を想定した。

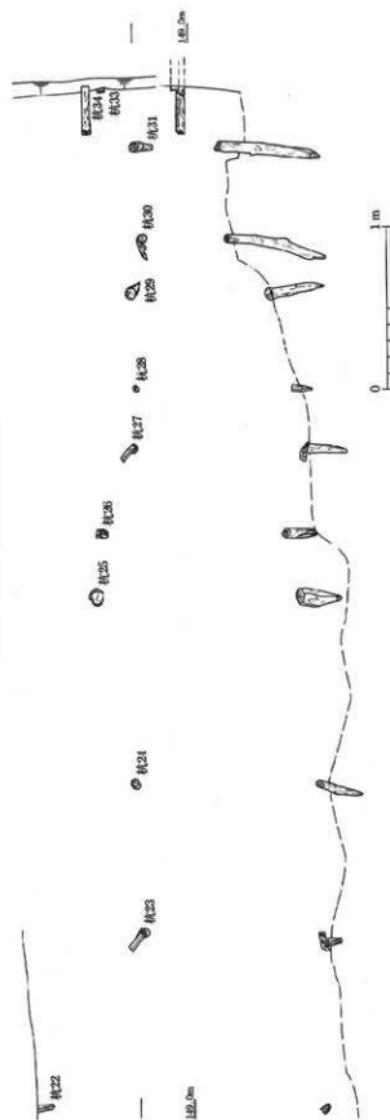
遺構に伴う木製品以外の遺物は皆無で明確な遺構の時期は不明といわざるを得ない。しかし先述したように、東壁にて杭が包含層内に設置されていることが観察されているので、包含層内の埋土を調査終了後にコンテナ10箱分を持ち帰り、洗浄して出土遺物の検出に努めた。その結果、土師質皿（第7図）が実測できた他に、次に挙げる土器細片が確認できた。土師器（質）片67点、須恵器片6点、瓦器片5点である。その他、炭及び木片等が検



第4図 調査区平面図及び断面図 (杭は見通し図を合成)



第5圖 杆1~17出土狀況測量圖



第6圖 杆22~31、34出土狀況測量圖

出された。なお調査時において杭付近で若干の自然遺物が認められたが、堤に伴う敷葉等は認められなかった。

断面観察によると杭-33・34は包含層内で検出できた。肉眼では包含層を切り込んでいる状態は確認できず、包含層の堆積状態

もほぼ単一層であった。そのため、杭の最終埋没時期は包含層の形成以前から直前に求めることができる。包含層の出土遺物は微少ながら概ね8世紀を上限とし、新しいものでも14世紀から15世紀（退化した瓦器片より）に限定される。このことから調査地内における包含層形成の上限は中世後半と推定した。上記の層位的関係から杭列遺構の時期としては中世の中～後半と推察する。

また、杭軸は全体的にN-57°-Wを指向しているが、土圧や礫の影響が激しい北西部での杭1～21はN-59°-Wの列をなし、現在の丹保池北辺軸（N-60°-W）に近値する。一方、良好に包含層が残っていた北東部での杭23から31ではN-55°-Wを示す。N-55°-Wの軸は調査地である高向周辺の方格プランの軸と完全に合致している。このことから、丹保池の北辺軸が現在の堤軸と、それ以外の地割プランに影響された軸を有していた可能性が想定できる。

出土した杭のうち杭-1(1)、杭-2(2)、杭-3(3)、杭-4(4)、杭-5(6)、杭-18(8)、杭-30(7)、杭-31(5)は樹種鑑定の結果、いずれもマツ科である。なお、鑑定していただいた（財）大阪府文化財調査研究センターの山口誠治氏に深く謝する。

#### 不明遺構（SXI）（第4図、図版4）

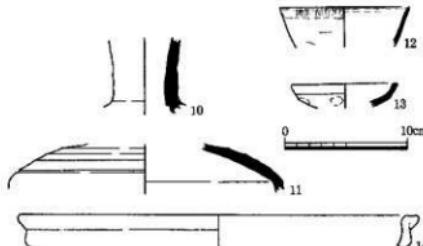
調査区西側で検出した土坑状の遺構である。検出長は軸3.5mを測る北側は調査区外へと伸び、南側で築堤盛土の擾乱で大きく削られる。出土遺物はなかった。

#### 築堤盛土出土遺物、包含層出土遺物及び表採遺物（第7～9図、図版6）

築堤盛土より古墳時代から8世紀の土器及び、近現代の陶磁器、土管、瓦、時期不明の杭等が検出された。包含層（灰色粘土層）の出土遺物は少なかったが可能な限り土のまま持ち帰り洗浄した結果、土師器、須恵器片の他に、土師質土器、瓦器片も含まれていた。また調査の合間を縫って丹保池内の表面採集に努めた結果、古墳時代から8世紀の土器、中世の瓦器、近世の肥前系磁器が採集できた。



第7図 包含層  
出土遺物実測図

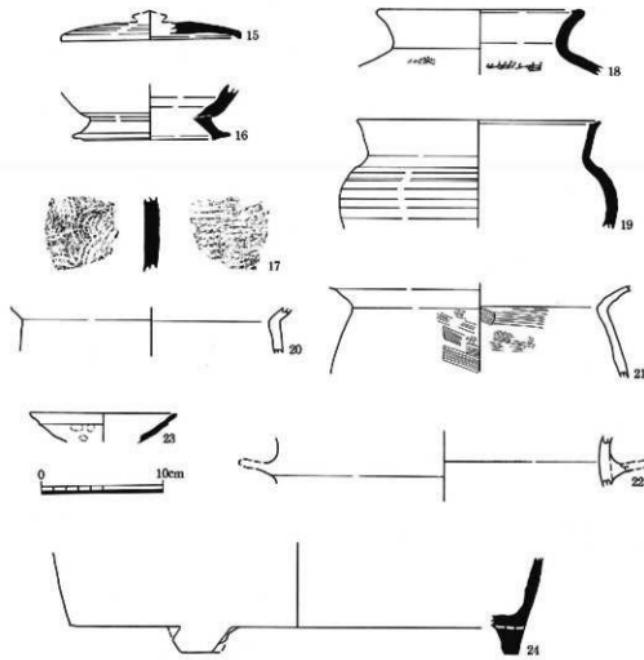


第8図 丹保池表採遺物実測図

(15)は須恵器の壺B蓋、口縁部径14.6cmを測り宝珠形のつまみを有していたと思われる。中村編年でIV-2~3、田辺編年でMT21~TK7である。(16)は須恵器の壺KまたはLの高台部分であり、高台径は10.5cmを測る。8世紀代のものである。(17)は須恵器の壺の体部片である。外面にタキ、内面に同心円文を残す。(18)は須恵器の壺で口縁部径16.4cm、(19)は須恵器の壺で口縁部径19.6cmある。(20)、(21)は土師器壺であり、いずれも口縁端部は欠損している。(20)の壺は頸部径21cmを測り、(21)は頸部径が19cmで内外面に右下がりのハケ目を施す。(22)は土師器の長胴羽釜である。内腹部径は25cmを測る生駒西麓産の胎土である。(23)の瓦器塊は口縁部径12cm。ナデ調整とユビオサエによる凹凸が見られる。尾上編年のIV-3にあたる。(24)は瓦質火鉢の底部で底部径37cmに脚を張り付ける。

包含層の出土遺物は土師器(質)片67点、須恵器片6点、瓦器片5点、いずれも細片である。実測可能なのは(9)の口縁部径6.5cmの土師質皿のみであった。

表採遺物は各時期に及ぶが、実測可能であったのは5点である。(10)、(11)が須恵器の長頸壺、(13)は瓦器の小皿で、口縁部径8.6cmを測る。(12)は肥前系磁器の碗、(14)は土師質の炮烙である。



第9図 築堤盛土出土遺物実測図

## 第四章 まとめ

調査の結果、杭列と不明土坑の他、明確な遺構は検出されなかった。また出土遺物は堤の築堤盛土より古墳時代から奈良時代の遺物が出土し、包含層より古代から14、5世紀の遺物が出土した。遺構に伴う遺物は検出されなかった。杭列は丹保池北堤の土止め的な機能を想定したが、この列軸は杭1～21がN-59°-Wを示し、杭23～31はN-55°-Wを指向していた。ここで注目すべきは、N-55°-Wは高向地内で見られる方格地割（条里プラン）と完全に一致する点である。以下、今次調査区で検出された杭列と丹保池、条里プランとの関係をもってまとめと代えたい。

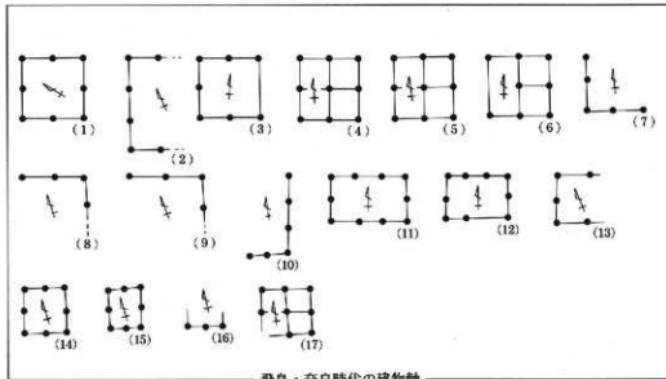
調査地である丹保池の成立に関して言えば、伝承の域を出るもののがなく、長い間不明な点が多かった。その確実な資料としては元禄八年（1695）の「加賀田村領境界地図」に「池」と記されていることが確認でき、宝曆十四年（1764）の「高向村明細帳」で池の存在が認められる。この丹保池は方一町の方形（ややいびつだが）をしており、池の所在する高向一帯は市域では珍しく条里的な地割を良好に残している。このことから丹保池の成立を条里施行時と考えることも可能である。しかしながら考古学の進展によって、畿内の中でも条里制施行が10世紀であったり〔大阪府池島福万寺遺跡〕、12世紀であったり〔奈良県箸尾遺跡〕するなど地域的なバラエティに富んでいることが明らかになってきた。高向遺跡に見られる条里的地割については、考古学的な水田遺構が未検出であるものの、既往の発掘調査によって古代から近世に至る掘立柱建物が30棟検出されていることから、ある程度の推測が可能となる。

すなわち、奈良時代を中心とする掘立柱建物17棟は統一的な規則性が見られない。全体的に北を向いているようであるが、これは微地形的にみて南北方向を残すG地区や94-1区での建物検出が多かったためであろう。（第1図）

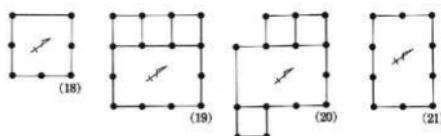
11世紀から12世紀の建物は全て条里地割と同じく（そして今次調査の杭23～31の杭軸と同じく）N-55°-W（N-35°-E）を明らかに指向している。F区で検出された4棟のみであるが、当該地での条里地割の定点を示していると思われる。

13世紀以降は再び統一的な規則性がなくなり、地形に沿った区画の建物で占められる。また、この時期以降の出土遺物は古代の遺物の出土範囲より拡張を見せていくことから、再開発による耕地の拡大が予想される。

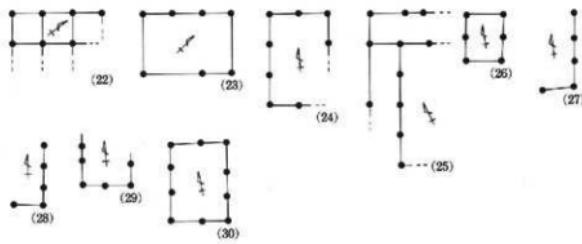
これらのことから高向周辺の条里的地割は11～12世紀の開発過程で成立した水田地割のプランであると考えられる。今次調査で検出した杭列の詳細は本文に譲るが、この杭列は条里プランと同方向を指向する杭23～31と、現在の堤軸に近いN-59°-Wを示すものが見られる。層位的な関係より、杭列の時期は中世の中～後半と推察したが、二つの軸の存在から、現在の堤軸と異なる古丹保池の存在が予想された。この古丹保池の北辺軸が、高



飛鳥・奈良時代の建物軸



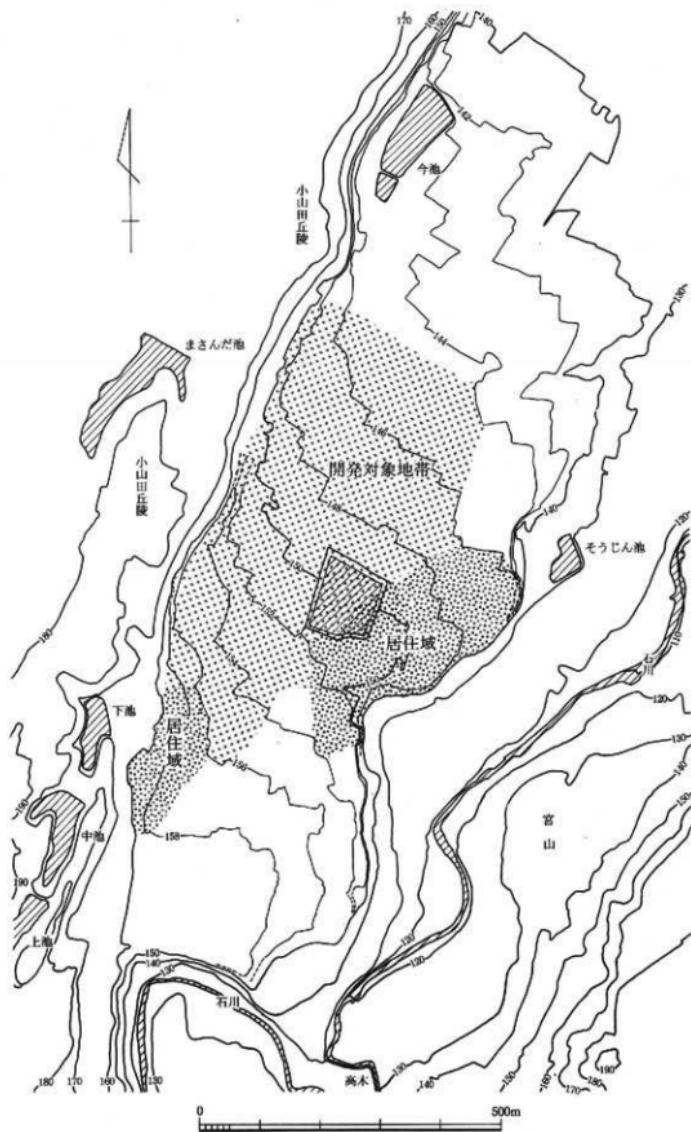
11世紀前後の建物軸



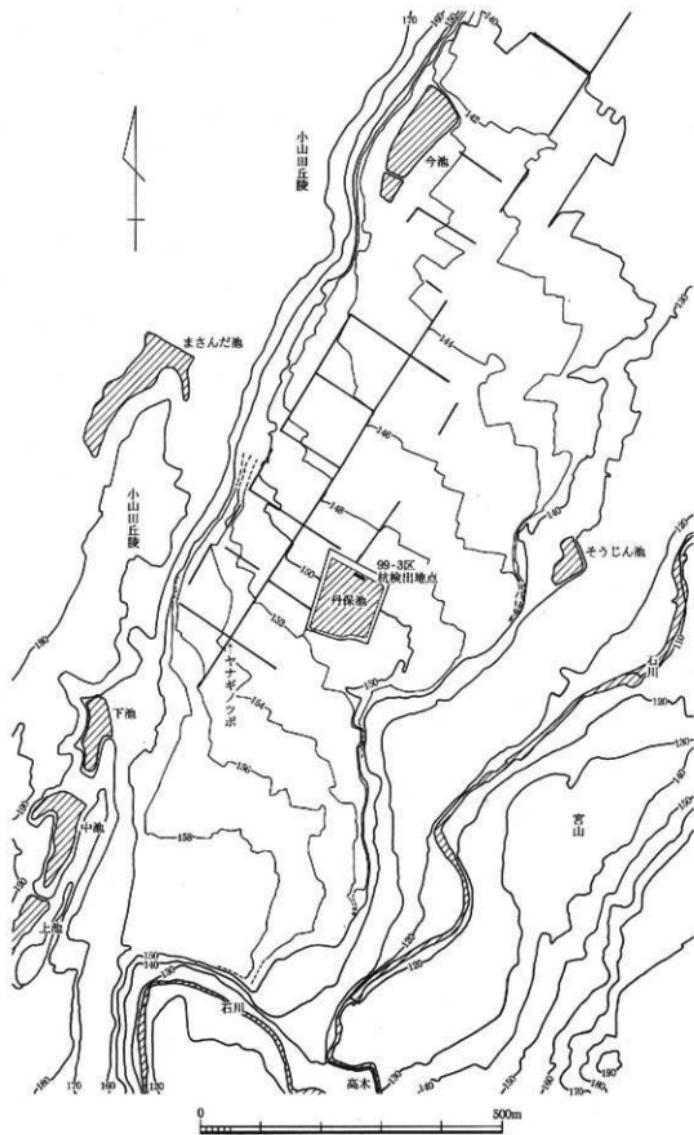
中世の建物軸

第10図 既往調査で検出された建物軸（表2と対応）

向の条里プランの影響を少なくとも受けているのであれば、丹保池そのものは条里プランの施行時である11～12世紀に成立したと考えたい。その後、数度の改修の結果、現在あるところの丹保池になったのであって、今次調査で検出した二つの杭軸はその過程を表しているものと考えられる。



第11図 古代の開発対象地帯と推定居住域



第12図 高向周辺の条里プラン (N-35°-E又はN-55°-W)

以上の結果から調査地付近である高向荘の開発過程を素描すると次のような。

飛鳥・奈良時代	高向において本格的な開発が開始される。開発は主に丘陵部縁辺の平坦部より行われた（第11図）。既往の建物軸から条里地割は成立しておらず、微地形条件に規制された不規則な形態の水田開発が予想される。居住域はこれら耕作地縁辺の微高地周辺である（第11図）。丹保池内も98年度の大坂府の試掘調査により掘立柱建物が見つかっているので、現段階で池は成立していないと考えられる。
平安～鎌倉初期	現存する条里プランと同軸を有する建物が現れることから、少なくとも現段階において高向一帯で条里プランによる水田開発が行われたと考えられる。なお、文献による「高向荘」の初出もおよそこの頃である。 今次調査の結果、上の開発に付随する水利関係から丹保池が築造されたものと推察できる。
鎌倉・室町以降	中世以降の再開発で高向縁辺部の段丘から丘陵部も開発の対象となる。条里プランの地割は踏襲され、又は再開発によって各々の微地形に沿った地割となる。発掘調査で中近世の遺構・遺物が見られるのは古代の遺物が検出される範囲よりも広範囲になり、耕地の拡大も想定される。江戸期には6つの溜め池により水が供給され、現景観とはほぼ変わりない状態であった。

註1 「觀心寺勘縁起資材帳」 元慶七年九月十五日（觀心寺文書）

註2 「加賀田村領並隣接領境界図」 元禄八年 中谷和夫氏所蔵（『河内長野市の古絵図』 河内長野市教育委員会 1983）

註3 「宝曆十四年五月 高向村明細帳」 山中源一郎家文書（『河内長野市史 第7巻 資料編四』 河内長野市 1977）

註4 『池島・福万寺遺跡発掘調査概要—89-1～6調査区の概要』（財）大阪文化財センター 1991  
なお、同遺跡の90-3区では7世紀の南北地割Aが検出され、条里地割が7世紀に遡る可能性が指摘されている。

註5 『奈良県第2浄化センター・箸尾遺跡を掘る』 奈良県立橿原考古学研究所 1993

主な調査区	主な時代・遺構・遺物	報告書
高向遺跡 I A～G区	绳文石礫・古墳～近世	『高向遺跡』 1989 大埋協
TKM86	中世（12世紀）	『河内長野市埋蔵文化財報告書II』 1988 市教委
TKO89-1	奈良時代掘立柱建物	『河内長野市埋蔵文化財報告書IV』 1990 市教委
TKO89-2	奈良時代・中世掘立柱建物	『河内長野市遺跡調査会会報IV』 1990 市調査会
高向遺跡 II A, B区	近世水田	『高向遺跡II』 1990 大埋協
TKO94-1	奈良時代・中世掘立柱建物	『河内長野市遺跡調査会会報III』 1996 市調査会
TKO95-3	自然道路・湿地	『河内長野市遺跡調査会会報IV』 1997 市調査会
TKO95-3	奈良時代・中世ピット	『河内長野市埋蔵文化財報告書IV』 1999 市教委
TKO96-1	中世ピット	『河内長野市埋蔵文化財報告書IV』 1999 市教委
TKO99-3	中世杭列	本報告書

表1 既往の調査区一覧（第1図と対応）

略号

大埋協＝財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

市教委＝河内長野市教育委員会

市調査会＝河内長野市遺跡調査会

No.	地区	遺構	方位	No.	地区	遺構	方位
(1)	I-F区	15-OB	N-32°-E	(2)	I-F区	16-OB	N-23°-E
(3)	I-G区	31-OB	N-3°-E	(4)	I-G区	29-OB	N-1°-E
(5)	I-G区	30-OB	N-3°-E	(6)	I-G区	32-OB	N-0.5°-E
(7)	89-2区	SB1	N-9°-E	(8)	89-1区	SB1	N-15°-E
(9)	89-2区	SB2	N-21°-E	(10)	94-1区	SB1	N-12°-E
(11)	94-1区	SB6	N-12°-W	(12)	94-1区	SB7	N-86°-W
(13)	94-1区	SB8	N-65°-W	(14)	94-1区	SB9	N-13°-E
(15)	94-1区	SB9	N-11°-E	(16)	94-1区	SB11	N-75°-W
(17)	94-1区	SB13	N-84°-W	(18)	I-F区	18-OB	N-38°-E
(19)	I-F区	22-OB	N-36°-E	(20)	I-F区	23-OB	N-38°-E
(21)	I-F区	26-OB	N-55°-W	(22)	I-G区	36-OB	N-35°-E
(23)	I-G区	37-OB	N-44°-E	(24)	I-G区	38-OB	N-5°-E
(25)	I-G区	39-OB	N-26°-E	(26)	89-1区	SB2	N-8°-E
(27)	94-1区	SB2	N-8°-E	(28)	94-1区	SB3	N-6°-E
(29)	94-1区	SB5	N-10°-E	(30)	94-1区	SB12	N-10°-E

表2 既往調査で検出された建物一覧（第10図と対応）

## 報告書抄録

ふりがな	たこういせきはっくつちょうさがいよう							
書名	高向遺跡発掘調査概要							
調書名	溜池等改修事業丹保池改修工事に伴う埋蔵文化財調査							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	広瀬雅信、尾谷雅彦、藤原哲							
編集機関	大阪府教育委員会							
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351							
発行年月日	2000年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °°'	東経 °°'	調査期間	面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たこういせき 高向遺跡	大阪府 河内長野市 高向	27216	23	34° 26' 06"	135° 33' 08"	99.11.02 00.01.15	80	溜池改修
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
たこういせき 高向遺跡	集落	古墳・奈良・中世	杭列・土坑	土師器・須恵器・瓦器				

# 図 版





調査区全景（南西から）



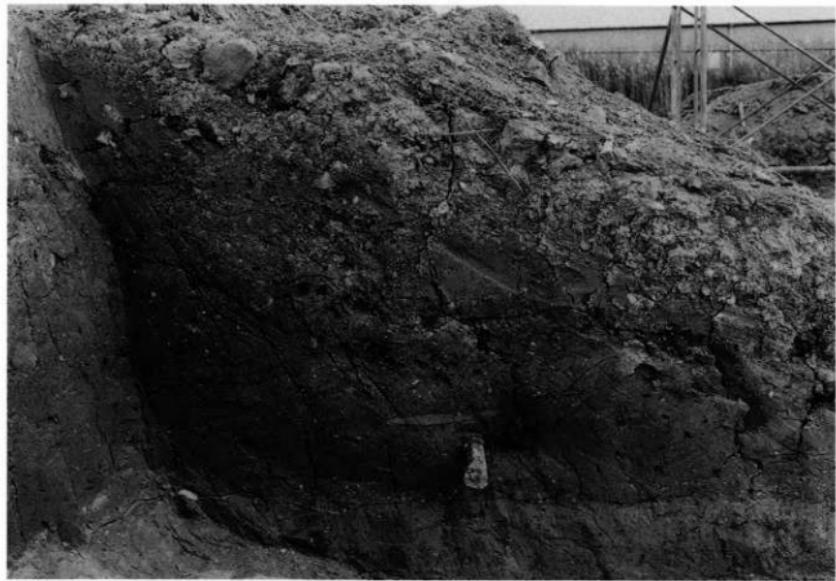
調査区全景（北東から）



杭列検出状況（北西から）



杭列検出状況（北東から）



北東壁断面 杭 33・34



杭 1～4



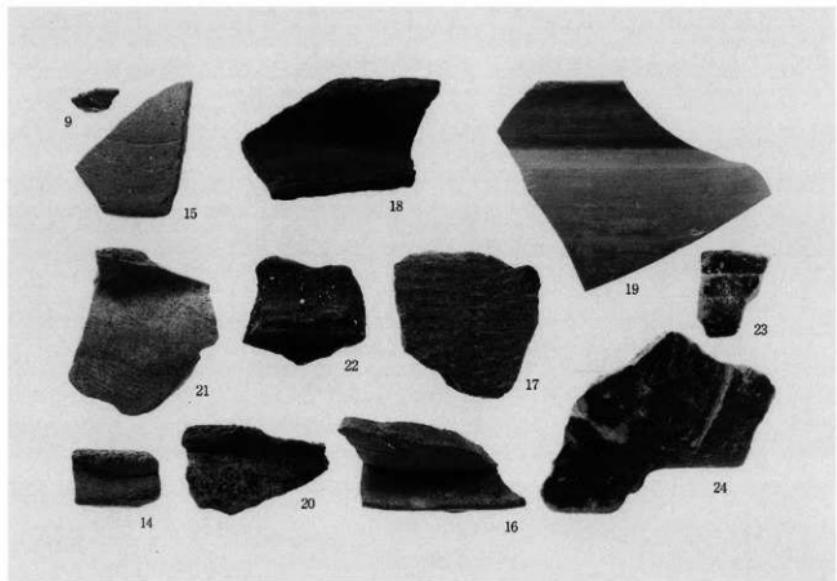
杭 11 ~ 21



杭 26 ~ 31 SX 1



杭30・31・33・34



包含層(9)、柴堤盛土(15~24)、表採(14)



